

2020年 人間発達学部附属子育て支援センター活動報告

古 賀 隆 一
宮 内 孝
野 村 宗 嗣
金 子 幸

はじめに

南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターは、人間発達学部の開設とともに、2010年4月から大学の地域貢献と学生の学びを主たる目的として子育て支援活動を行っている。本センターの活動は「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」「子育てひろば みなみん」「心理サポート」の5つからなり、「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」は本センター開設当初から、「子育てひろば みなみん」は2015年3月のトライアルの後2015年5月から、「心理サポート」は2016年9月から毎年継続実施している（春日ら,2018；野村ら,2019など）。

「子育て支援室」は臨床発達心理士の資格を持つ学部教員1名が、地域の方を対象として子どもや子育てに関する心理相談を受ける活動である。開設当初から続けてきた活動の一つであるが、2020年度は資格を持つ専任教員の不在により実施が叶わなかった。2020年も実施を望む問い合わせが複数寄せられたため、今後、体制を整え、引き続き活動できるようにしたいと考えている。「チャレンジ運動教室」は体育専門の学部教員1名と学生ボランティアが、運動の苦手な子どもたちとその保護者に運動遊びを提供する活動である。「あそびの教室」は美術専門の学部教員1名と学生ボランティアが、地域の子どもの保護者に工作を通じた親子遊びを提案する活動である。「子育てひろば みなみん」は非常勤保育士と学生ボランティア、そして複数の学部教員が、地域の未就園の乳幼児と保護者を対象として交流の場の提供と育児相談を行う活動である。「心理サポート」は学部教員1名が障害のある子どもと保護者を対象としてコミュニケーションや姿勢・動

作への支援を行う活動である。

本報告では、2020年の「人間発達学部附属子育て支援センター」のそれぞれの活動について報告する。

1. チャレンジ運動教室

(1)ねらい

子どもの運動能力低下の問題は、我が国の大きな課題である。文部科学省が実施している「体力・運動能力調査」の2019年度結果によれば、低下傾向に歯止めがかかっていた児童の体力・運動能力が再び低下した。特に5年生は、過去最低の結果となっている。このような問題は、日本学術会議が「4歳から6歳の幼児の運動能力は低下傾向にある」と指摘するように、既に幼児期から始まっている。

これは、テレビゲームやコンピュータゲームなどに触れる「スクリーンタイム時間」の増加によって、運動遊びの時間が減少したことがその大きな要因の一つである。すなわち、子どもが思い切って身体を動かして遊ぶ機会が減少し、それによって体力や運動能力が育っていないのである。

このような問題を解決する一助として、「チャレンジ運動教室」を2010年から開催している。この11年間の申込者合計は2303名である。教室は、145回開催している。5歳から8歳までの4年間にわたって継続的に参加する子どもは少なくない。

参加する保護者と子どものそれぞれのねらいは、下記の通りである。

- ・保護者…子どもと一緒に運動を楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子を観察したり、それぞれの動きの指導法を身

に付けたりする。そして、この教室をきっかけに、運動遊びを楽しむ時間を子どもに設定しながら、子どもの心身の発育発達を促す。

- ・子ども…運動遊びの楽しさやできない動きができる楽しさを味わいながら、多様な基本的な動きを身に付ける。この楽しさを動機付けとして、日常生活のなかで運動遊びに取り組む意欲と態度を育てる。

(2)令和2年度の教室の概要

①参加申込者：122名

- ・幼児（5.6歳）とその保護者 26組
- ・小学校1.2年生とその保護者 38組

②教室開催回数：12回

- ・前期の部 6/20,6/27,7/4,7/11,7/18 (5回)
- ・後期の部 10/17,10/24,10/31,11/7,11/14,11/21,11/28 (7回)

③教室の内容

本教室では、特定の動きの習熟を意図する「動きの洗練化」ではなく、「動きの多様化」を目指している。本年度に取り組んだ運動遊びは、下記の通りである。

a) 移動系の遊び

- ・信号ゲーム ・ラダー遊び ・オセロゲーム
- ・長縄跳び ・バルーン ・しっぽ取り
- ・3秒間走 ・りすと木 ・ライン鬼ごっこ
- ・しっぽとり ・2人で海を渡ろう 等

b) 操作系の遊び

- ・トンネルコロコロゲーム ・玉入れ
- ・ゴミゴミボール遊び ・バトンスロー
- ・ボール投げ遊び ・新聞紙遊び
- ・バッティング ・チャンバラ ・フープ遊び 等

c) 姿勢制御運動系の運動

- ・マット遊び ・跳び箱遊び ・鉄棒遊び
- ・進化ジャンケン ・ダンス ・人間オセロ
- ・座布団、敷き布団、掛け布団 ・Gボール遊び
- ・マット引き ・綱引き 等

④子ども教育学科学生の参加者：のべ270名参加 宮内ゼミに所属する3.4年生が、担当教員から

事前指導を受けて、本教室の企画・運営そして運動指導の中心を担う。当日は、1.2年生がボランティアとして参加し、子どもとかかわりながら運動指導のサポートを行う。

当初は子どもと遊ぶことができなかった学生が、子どもとかかわる経験を繰り返すことで遊ぶことができるようになる。子どもへの説明・指示がままならなかった学生が、子どもたちや保護者を適切に動かした運動指導ができるようになる。この経験が、教師に必要な実践的な力量形成を図ることにつながっている。

(3)今後の課題

- ・運動指導にかかわる課題を明確にして、その課題解決のための指導法や教材開発に努める。
- ・本教室に参加する学生の学びを明らかにして、本教室における学生教育の在り方を検討する。

2. 毎年開催してきた「あそびの教室」はコロナ禍で中止した。

3. 子育てひろば「みなみん」

子育て支援センターの取り組みの一環として子育てひろば「みなみん」の取り組みを実施している。地域の子育て家庭を支援すること、また、学生が乳幼児とその保護者とかかわりを学ぶ機会を作ることを目的に、定期的に開催を続けている。今回は、令和2年1月から令和2年12月までの活動について報告をするが、令和2年3月からコロナウイルス感染拡大防止の観点から実施を見合わせており、令和2年12月まで開催ができていない現状である。

(1)実施の概要

①実施回数：計4回（1月～2月）

開設当初から、原則月2回、毎月開催することを目標としている。隔週の火曜日を実施日と設定し、午前10時から12時までを開設時間とした。実施日の詳細は以下の通りである。

1月	14日、28日
2月	4日、18日

②利用者数

1月から2月までの計4回の実施で、利用した保護者の人数は延べ31人、子どもの人数は延べ46人であった。1月の開設時には近隣の子育てサークルの方が団体で参加をされた。

③参加学生数

参加学生については、ボランティアの学生に加え、子育て家庭支援論受講の3年生が輪番で参加をした。1月から2月までの計4回の実施で、学生の参加人数は延べ29人であった。ボランティア学生の中心は3・4年生であった。

④運営スタッフ

子育て支援センターのパート保育士であるYさん、4年生の5名を中心として準備、運営を行った。学部教員は、担当時間を割り当て参加し、学生へのアドバイスや保護者から相談があった場合には対応ができる体制をとることができた。

複数の教員がみなみに参加をすることで、それぞれの専門知識を生かして保護者からの相談に乗ることもできていた。

(2)取り組みの実際

毎回、実施日の1週間前に参加学生が集まり、準備会を行った。準備会には子育て支援センターのパート保育士であるYさんにも加わっていただき、学生へアドバイスをお願いした。準備会では、お楽しみ会の役割決めや手作りおもちゃの作成、既存のおもちゃの消毒、壁面構成等、実施日に向けての準備に取り組んだ。また、実施の案内・広報に関しては、大学のHPに開催案内を掲載することや、平成29年から開始したみなみのTwitterにも開催日の案内を掲載し、周知に努めた。Twitterでは、施設の写真や学生の準備会の様子などを掲載し、初めての人でも安心して参加ができるようにしたことに加え、開催案内や次回の活動予定内容も積極的に掲載をするようにした。さらに、近隣の子育て支援センター等に開催案内のチラシを配布し、他の子育て支援センターを利用する方に本学の取り組みを知っていただくようにした。

お楽しみ会では、パネルシアターやペープサー

ト、からくり絵本の読み聞かせ（夢を叶える塾にて制作）、ダンス、わらべうた等、学生の趣向を凝らした内容で実施した。

今年は、2月に季節の行事である節分を実施し、参加者が日本の伝統行事に触れ、親子で楽しんでもらえるような計画をし、実践した。

活動の流れは以下の通りである。

9：00～	学生集合 →環境構成(受け入れ準備、掃除等)、お楽しみ会のリハーサル
10：00～	親子の受け入れ →受付、子どもの名札を作成
11：30～	お楽しみ会 →パネルシアター、ペープサート、からくり絵本、わらべうた 等
12：00～	片付け
12：10～	一言反省会

(3)今後の課題

2020年は活動の機会が1月と2月に限られてしまった。例年3月は4月から活動の中心を担ってくれる学生と引継ぎを兼ねた活動を実施し、4月から新体制での活動を展開している。今年も新たに活動の中心に就いてくれる学生が複数名いたが、活動の機会を設けることができず、学生の学びにつなげることができなかった点は残念である。また、開催を楽しみにしてくれている地域の方々の声に応じることもできなかった。しかし、開催についての問い合わせを複数いただけたことで、「みなみ」の活動が地域の方に広く浸透している実感を持つことができた。

今後は、活動再開の目途が立ったら、広報活動を積極的に行い、これまで参加をしてくださった方々にお知らせすると同時に、新たに参加してみたいと思っていただけるように充実した活動を計画したいと考えている。また、新入生等に「みなみ」の活動を周知していくことで、ボランティア学生の積極的な関りを促していきたいと思う。

4. 心理サポート

子育て支援センターの活動のひとつとして、心理サポートを行っています。心理サポートという

名称は、障害のある人の姿勢や動作の改善を通して、からだと心の安定をはかろうとするところからきています。

従来より、支援学校を卒業して福祉事業所に通う3名、支援学校中学部に在籍する1名、小学部に在籍する2名を対象として、毎週水曜日の15時30分からの部と木曜日の18時からの部に分かれて、サポートを行ってきました。サポートを受ける時間帯としては、毎回各1時間程度としています。

(1)サポートのねらい

サポートのねらいは、身体の機能改善や向上から心理面の安定をはかろうとするものです。活動を行う中で、人との関係づくりを含めたコミュニケーションカの向上をねらうものでもあります。

福祉事業所に通う3名に共通するのは、支援学校在学中は、個々の実態に応じて意図的に身体を動かす指導や支援が行われていたのが、卒業後は意図的に身体を動かす機会が減っていることです。日常生活を行う上での着替えや、階段昇降での身体づかいにも不具合が生じるようになり、特別支援教育室に親子で相談に来られたことが心理サポートへの活動参加のきっかけになっています。

支援学校在校生3名については、姿勢が悪かったり動作がうまく行えなかったりといったことから、姿勢や身体の動きを良くしていくことで、健康の保持や向上、人との関係づくりも含めたコミュニケーションカの向上を目指すというものです。

(2)サポートの内容

サポートを受けるに至った個々人の環境やそれぞれの身体の状況にもよりますが、福祉事業所に通う3名に限らず、普段から意識して身体を動かしていないと、障害や加齢といったことも含めて、身体にうまく動かすことができないといったことが生じてくることがあります。また、普段から身体を動かしていないと、急に身体を動かしたりすると、痛みが生じてしまったりした経験のある方もあると思います。意図して身体の状況に留意し

ていないと、知らず知らずのうちに身体に変化がでてきてしまっているというところでしょう。また、身体がうまく動かないと、気持ちも落ち込んでいくといったことにつながることも多々あると考えます。

そのようなことから、姿勢や動作が自在にとれるように心身を維持しておく必要があると考えます。自分の意図した姿勢や動作ができるように、普段から、意図的に身体を動かす場を保障していく必要があると考えます。

そのようなことも鑑み、心理サポートでは、サポートを受ける対象者の実態から、以下のような2つのグループにて、サポートを行ってきました。

- 1) 立位・歩行での姿勢や動作の改善をめざすグループ
- 2) 座位での姿勢や動作の改善をめざすグループ

(3)今年度のサポートの経過

今年度はコロナ禍の状況を鑑み、実施日や実施場所を考慮して、サポートを行いました。

- 1) 立位・歩行での姿勢や動作の改善をめざすグループ

今年度は、コロナ感染の状況から、大学構内でのサポートは見合わせ、大学近辺にあります都城グラウンドでサポートをはじめました。

グラウンドでの活動ということもあり、大きく身体を動かす中で、身体全体をバランスよくスムーズに動かしていくことを、ねらいとしました。立位をとることや歩行をするに加え、しゃがむといったことなど、身体を動かすイメージづくりにも努めました。歩くから走るといった活動を繰り返すことで、力の入れ加減や身体づかい、姿勢や動作のイメージの認識や体感することをねらいとしました。

以下に設定した活動を紹介します。

ア) 活動について

- ①グラウンドの観客席を使って、座位にて「腰を前後に動かしての腰緩めと腰入れ（腰を落とす⇔腰を入れる）」といった動作を一緒に繰り返し行う。
- ②座位から立つ⇔座るという動作を繰り返し行う。

- ③座席前に設置されている手すり（鉄のバー）を両手で持ち、しゃがむ⇔立ちあがる動作を繰り返す。
- ④手すり（鉄のバー）の下を身体をかかめてくぐる⇔後退して元の場所に身体を戻す。
- ⑤グラウンドをインターバルで、歩く⇒早く歩く⇒走る。

イ) 活動経過

- ①座位で腰を入れたり落としたりといった動作を行う。腰を入れた状態から、左右に旋回する動作を行う。⇒腰を入れたり落としたりといった動作ができるようになった後に、腰を入れた状態から、左右に身体を旋回する動作を行ったところ、旋回がスムーズにできた。
- ②座位から立ったり座わったりという動作を繰り返す。⇒3分間程度なら続けて動作が継続できた。継続して行うことで5分以上活動を続けることができた。
- ③バーにつかまって身体を沈めた状態から身体をバーに引き寄せる。⇒左右均等に身体をつかえるようにサポートしたところ、歩行時の姿勢に身体の左右のブレが少なくなっているのを参加者の歩行姿勢から確認できた。
- ④身体をかかめて、障害物（観客席の階段の手すり）の下をくぐり、また元の位置にもどる。⇒活動を繰り返す中で、自分の身体イメージを獲得し、身体をかかめての前後の動きが確実なものとなった。
- ⑤グラウンドをインターバルで、歩く→早く歩く→走る。⇒学生サポーターの伴走もあり、動作の違いを繰り返しの反復の中で、切り替えを認知して動作としてスムーズに行えるようになった。

2) 座位での姿勢保持を通して学ぶグループ

コロナ禍での参加ということで、今年度は1名の活動への参加となりました。当初は大学校内でのサポートは控え、保護者からの聞き取りや通信による映像での姿勢や動作の状況把握を行い、保護者が自宅にて姿勢への配慮や動作面のサポートとしました。身体の拘縮予防等を考えると、姿勢や動作の状況を把握しながらサポートをできるか

たちで進める必要がありました。

そのような状況にありましたが、サポートの実施回数は5回と例年より大幅に少ない回数でしたが、対面でのサポートを行うことができました。

以下に設定した活動を紹介します。

ア) 活動内容について

- ①座位で姿勢を保持する。
- ②自分で身体のバランスをとり、傾きが生じたときは、手をついて姿勢を保持する。
- ③肘をつき、座位で身体を支えた状態から、腕に力を入れ、身体を起す。

イ) 活動経過

- ①座位で姿勢を保持する。⇒サポーターにて一旦座位姿勢をつくると、自分でそのまま姿勢を保持できてきた。少し身体が傾くように身体をおしても、身体の傾きを元に戻すといった様子が確認できた。
- ②自分で身体のバランスをとり、傾きが生じたときは、手をついて姿勢を保持する。⇒身体を傾かせて手をつかせると、手で身体を支えて、そのまま座位姿勢が保持できた。少し身体に圧を加えても、お尻で踏ん張って直に身体に戻すといった様子を確認できた。
- ③肘をつき、座位で身体を支えた状態から、腕に力を入れ、身体を起す。⇒身体が傾くと、自分から手をついて身体を支えるくるというのは難しいが、身体を傾かせて、手をつかせると床を押し返し、身体を立てていくといった様子を確認できた。また、傾いた身体を手で支え、肘を伸ばすという動作を誘導しながら身体を起こすといった身体の動きを体感させると、自分でも腕に力をいれて身体を起こそうとする姿を確認できた。

(4)経過からのまとめ

1) 立位・歩行での姿勢や動作の改善をめざすグループ

コロナの感染状況をみながら、しばらくは都城グラウンドで活動を行った後、大学校内でのサポートを再開しました。以前の室内での活動に加え、校内の芝生の斜面での歩行、芝生斜面の上り下りや、木立のある広場での鬼ごっこなどを交え、身

体全治をつかって楽しむ活動も取り入れました。屋外でゲーム的に身体全体をつかっての活動を行ったことで、活動に参加する学生サポーターとの言葉や行動でのやり取りも活発となり、笑顔や笑い声が自然と生じるといった様子を見ることができました。

楽しんで身体を動かすことで、身体を動かす楽しみや充実感も得ることができたと考えます。身体を動かす中で、自分の身体のイメージやどのような状況でどのように身体を動かせばよいのかといったことが、サポートを受ける中で、体感できてきていると考えています。

2) 座位での姿勢保持を通して学ぶグループ

活動への参加者は、コロナ感染への懸念もあり、支援学校中学部在籍の1名でした。その1名については、4年前は寝たきりといった状態であり、週に1度1時間程度、継続してのサポートを行ってきた経緯があります。当初は、座位保持を介助にてサポートを始めたものが、現在では、座位姿勢で、しっかりお尻を土台にして、上半身を倒れないように保持ができています。また、自分の手を支えにして座位姿勢を保持することもできるようになってきています。手が支えになるようにサポートをしています。身体を傾かせて、手で支えるといった動作をサポーターと一緒にやったり、肘で身体を支えて、そこから腕を伸ばしていき、最後は手をつけて身体を支えるといった活動を繰り返すことで、それぞれ動作体験を繰り返すことで、“身体が傾いたら、自分から手を出して、身体を支える”といった動作が達成できればと考えています。自分から動作の発動をし、それが姿勢の変換や保持につながればと考えています。

動作の誘導や姿勢づくりでは、サポーターの感覚に依拠することが多いところですが、サポートを繰り返す中で、“身体を起こして座る”といったことや、“身体が倒れそうになったときは、手をつけて身体を支える”といったことを、自分の力でできるよう、サポートのあり様を工夫しながら、進めています。

(5)サポーター育成

心理サポートでは、多くの学生がサポートに

入っています。サポート活動を通して、ひとりひとりの状況に応じたサポートのあり方を、障害やその背景をとらえることの大切さを、実際にサポートする中で学んでくれています。

また、心理サポートに関係する教員が、コミュニケーションや、動作や姿勢に関する研修会を企画し、実践を行う上で必要な学びの保障に努めています。

コロナ禍であったこともあり、学生サポーターには十分な研修の場は設けることはできませんでしたが、研修と実践をうまく組み合わせ、有効なサポートをめざしたいと考えます。

学生サポーターが、サポートを受ける側の状況や将来への思いを受け止めながら、サポートができるように、心理サポートを進めていければと考えています。

おわりに

人間発達学部附属子育て支援センターの4つの活動について2020年度の取り組みを報告した。

それぞれの活動は、地域の子どもとその保護者を対象とし、各教員の専門性を活かした取り組みとなっている。学部開設時から10年以上が経過し、学生と教員、そして地域が一体となって様々な活動を継続して展開してきた結果、大学と地域が融合した子育て支援が実現されていると言える。

2020年は世界的に流行したコロナウイルスの影響でそれぞれの活動が規模を縮小したり、実施を見送ったりすることとなった。しかし、そのような状況下でも、学生と教員が感染対策を徹底しながら試行錯誤し、地域の子育て家庭を支える支援を継続したいとの思いは消えず、少ないながらも活動が実施できたことは大きな成果だと言える。

2021年も引き続き、本活動の目的である、大学の地域貢献と学生の学びを実現するため、継続的に取り組んでいきたいと考える。

引用参考文献

春日由美・宮内孝・古賀隆一・金子幸（2018）
2017年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 8, 119 - 124.

野村宗嗣・宮内 孝・古賀隆一・金子 幸・鳴海正也（2019）2018年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 9, 107 - 113.